私の戦争体験記

藤田　喜久次（大正 11 年生まれ）

昭和 18 年 10 月 5 日、金谷村役場より招集令状が届く。長男の私が出征してしまうと働き手が減ると思い懸命に稲刈やはせ作りを行い、3 日後には神奈川県東部八十八部隊第二無線中隊に入営するため家を後にした。そこで半年間の教育を受けた後、外地に行く者は外泊が許され帰宅し先祖の墓参りをしてすぐ隊へ戻った。“これが最後だな”と心の中で思った。

その後電信第二十八連隊に編成され出動命令が下る。3 月、雪の相模原町を出発し、九州の門司港より出航、夜中に釜山港下船。そこから夜の行軍4 時間歩いて山洛に到着。山洛にて実弾を渡された。“いよいよ戦場だ”満支国境を汽車で南下、兵士達の抑留感が増す。揚子江を船で無湖へ、そしてより上流の湖口へと進む。湖口にて下船、ここで上陸後初の食事の支度を行った。クリークの濁った水を汲み、沈殿させて沸かす。だがマキ割りの道具など無く、毎日必要な飲料水の確保にも大変な苦労をした。

第七船団無線最後尾班として、石膏窟へと船で揚子江を進む。下船準備のため馬を引いて桟橋を渡る時、馬があばれ出した。1 ヶ月近くも船倉に繋がれていたからだ。後足を骨折した 3 頭は薬殺された。馬が減った分その荷物は自分達が分けて背負う事となる。自分の物だけでも精いっぱいなのに。その上、馬の事故で出発が遅れたため、1 日八里の強行軍が 10 日も続いた。一里を 45 分で歩き 15 分休憩なのだが、その休憩中には馬の水汲みやエサの麦刈り等で自分は休めない。中隊の列から落伍すると匪賊達に襲われるぞと言われたが初年兵は歩くのがやっとだった。また私達最後尾班は軍道に近い畑から徴発して来いと命じられた。それは、農民の畑の作物を取って来いということなのだ。中国の農民に迷惑をかけた。私は畑の番をしている老人にタバコを 1 本渡して、作物を取らせてもらった。現地の貧しい家の子らが日本兵にタバコを売りに来る。そしてその吸殻を集めて持ち帰る。家でそれを解して新しく巻き直すのだ。日本兵は吸殻をそのまま子らに渡してやれば良いのに、わざと足で踏み潰すのだ。私は日本人は本当に情けないと感じた。

4 月 24 日、揚子江東側で河南作戦開始。私達は北側の信陽地区にいたが、それに参加するため高等班に編入し、信陽花谷公館にて武漢本部と確山との中継を担うこととなる。確山まで兵士を迎えに行き信陽に戻る任務は他の連絡班が行ったのだが、線路は全て中国兵に取り去られてしまい北支まで歩きとなった。北支から南下する兵士達の服はボロボロ、半数以上の者が義友の遺骨を抱き足を引きずり、やっとの思いで帰ってきた。「これで勝戦といえるのか！」声をかけても皆下を向いたままだった。兵士の中には歩き疲れ、気が変になった者もいた。彼は鉄道線路を見た時“もう歩かなくていいんだ”と喜び、泣いたり笑ったりが止まらず、3 人がかりでやっと連れ帰ったのだが 3 日目に泣き疲れて死んでしまった。

信陽城にアンテナを張り終えて本部と交信可能となり、そして苦労して運んで来た爆弾や兵器を城の物置小屋に運び終えて喜んでいたら、B29、九機の爆撃を受けた。自分達は無傷であったが爆発は二昼夜続いた。

12月18日、武漢軍指揮下の電気通信所に爆撃を受け、この時は中隊8名、馬57頭が死んだ。この爆撃は木造家屋の日本をどう攻撃するのが効率的かを試すためのものだったのだ。

昭和20年に入って食糧不足が増し一日二食になる。波隊本部爆撃により荒井班長以下13名死亡。湖口にて初年兵の輸送船龍山丸が魚雷に触れ沈没、444名死亡。戦況が日々悪化する頃、母からの小包を受け取った。その日は私の誕生日であり只々母の一念と感じられた。

通信兵の任務、打電により私の手首の痛みはひどくなる一方だったが湿布薬すら無い。幸い暗号を組む仕事に替えられたので切り込み隊に入れられずに済んで良かった。

昭和20年7月17日、米英中による“ポツダム会談”が始まり、26日降伏を勧告する「ポツダム宣言」を発表したが、日本軍はそれを受諾しなかった。あの時すぐに受諾していれば、どれ程多くの人の命が助かったか分からないのにと、本当に口惜しい思いに今もさいなまれる。

そして8月15日、日本軍は正式に停戦を申し入れて戦争は終わった。

昭和21年4月、全中支復員通信統集団に転属となり上海へ異動、乗船司令部無線通信班勤務を命ぜられる。7月板花班長以下私も含め5名は最後まで残ることとなり、その後の復員船はいつ来るか不明とされた。が、朝鮮少年軍通信隊のおかげで1週間後に出航することが出来た。上船時に持ち込みが許可されたのは鉛筆2本、箸2膳、下着上下2枚、上着夏冬各枚。それ以外は全て実家から届いたハガキまでも没収された。